三国志文案 初編 下

914.5
K0621k

国立国会図書館蔵書

寄屋文集初編巻之下

首男樓記

むかしの男と名をあらそひ。時々ふる郷のかりの宿。思へばはかなき都なれと今やうよう思ひ入て。墨田川のほとりよ。遊びをりのたそびよなんこゝはあなたこなたの花ゝパ。はた菊の東よりもめるゆゑよしみ。まことに花ぞ。今ぞしくハ。うつの花はぎそんとまつ。さて人絵所のよそをもをさしおのづからの色なれば。ふだのゆゆのしのあつなどゝ。ふれよくとよくしまとまを。ふる形きう五枕あるひとれなりしまん。そのあづまをやどうぞ所。在五中将の。

国立国会
25.8.10
図書館

210556

いざるとそんとよみなひ〜こぎハちまぶみめぐりのほとりの都。嶽の
ふもと白ひ。岩屋の森はひらぎぎぬ。こどうの中よりとびこんぐ法花の堂は
舟。浪ようこのべるみせ。岩のこうやとまをやあうりそひとぶ事。こるは
のちくこそはちとぐく。草のこもけとちりぬべき。こやびうなる わうりあり
うぐ。ほひまま〜むさるのぬ〜さへいこの仁絵のあさりこそこんのはいをの
浦よりくんるぐ。婦ちの杉はちとをへて。海辺のこけみをみうとはあ
やく消うせまこそ。はれまら物あ〜くこどれば。こうよ〜らまを。ま
こは箱のひづまくどりよ。ぐちあ不ぐりは旅ちめや。むう男よあぐ〜へて。
はゆるよ〜をおのふべ〜。まぐきよ時〜くどこの都のこぐく〜こひ〜こは

こはなる。ぐうれのいかはあぐよりき。

細雨書屋記

おのをわのきぐよりわ。雨をちのむ癖ありて。をもう都よはこあり〜はる。面
ふを廣沢の池。なびくまのう〜こふありけり。をを水のおもてをうつをを。ろ
ま〜人の跳躍とひ。こくるの人は波のあをおるとよあるちぐのひ。ぬ〜ちつう
めるう。俗ををこるわぐあう。いぐを好む心の形くて。さばこう書き北平
北道をめををばちつかようべき。移の屋はいるぐ。ををく〜ちりこふをこむ所
の名ををちこちよ雨のを頁をこるぬおのれよおあぐ心よをぬまづいとむつまぐく
ぐおりひあここを。げよ梅さくを春のひ〜ぬるる岩のとぐん〜つ。ぐをく

をぶつ木のしたに座をさまよひ月のたもとの袖ぬれぬべきそぞろ寒
ふきつ。前のちりの上洗ぢふよたゞぢこそあるハちゝ母のたもとこそゆふ立のあ
ぶりをなぐのあ。ひとハ麻ざめの枕。まぐさ社のまぐらをたゝしなどいふ。母とゝべば
品ふき物のら。四の尉のたりまふ。そのくさひを尋ね出つ。りそたゝやゝめ
たるを。ひとのなる西ひのひとつあるを中よりきさ。日ぐゝ高のよふく
らを面だゝ。のごのなる物をあゝびあゝんおゞゆ。ちるふるとるちる社ぬあゞ
たる。男ど本よあつる所とのいひしらびは部ゝるよ。かる時よ去紙。をつき影よ出
事る物ちうを。杉のを今ち若。表面のそばふる日。
新保ゝ霧を面ちこゝんるゝる。是ふの霧れ石をうり有と

とゝんうゝり。その泪をつゝふけを。その部ちりとゝやひをのさんど
行いとのごのんゝ間ど心よ面をなのゝむをきゝ人とちを。ちのそどあをゞさゞうんめれ。

徒然庵記

峰よのぼりてゝきこゝをつみ。若よゝぐりてあうをくむ。山の奥は居ゝ。うゝべを
住をゞちんとあゝまからゝれゞ。ふるゝゝれ。ゝ。のなどあ。わをらるゝをりは
ずゞけをゞ。心の用ゝ面ゝをまなるべき。切来のおゝちまゝよひゞきゞりをこのひの
声やゞゝる学問る市の中は住のゝ。そゝをらうゞゞくゝゝゆめをゞ。立まるふ
夢ゝゞんすゞらゞゞ下の思ひやいのよつをゞあるゝ。やゝをゞ以よいをるゝ世
をゝゝ思ゞゝゞゝべ。市よをあゝるゝ角を知ゝゝるゞのなのらんやゝ元ゝゞ家を。

法然のやとりのひとりぱうんの伴の者でもよりおのひとりをあづけしるまゝにぱうんの人常よりなぐさくせるふるのつまをくるの銭つゝをもつて舞くいとまこのみどりをもあるをもあるざりよかいやりをて。伯父の源氏のあをあをびのびうんやうよりの法ハ伯すろおそ一あをとゝぶぬまるつをくとをゝこの法をいのよくゝ一ぬふぞとをふまるつをぐくとこゝへつ。なぶまれのゝ日をるをたをるも乃ちををぐくる人おのづのゝよ恋の名とかゝくるゝこゝめをもくをのふゝよ。有職なるのをぐるをもつぐゝよいび。男女の交情のひとれをるくをうゝをきゝれど。ををゝハ芝れついでのををびゝをぐゝそ。おるもるハぐゝをの芝ようまれゝふゝと。このきゝ芝一より。伴をいのなるのれをようひをんゝをひけるゝをぢめれ泊をぐ。をぐをふ節のねぐびをををぐ芝常の芝よ芝むゝ一めんゝをの方便のゝを求べ。法ハあをゝどゝ分ゝりの後れ身をもゝむるゝをゝ一ちぐゝん人名。をのちハゝを紀をあきゝゝめ。物ゝりあれ物をゝをゝん人ハ芝大ゝるををべけをぶ。元法ぐゝゝる所もゝ一ばぐを。ようける。ゝをれ四の奥よ尾を結ぐびゝる。心の内よゝきゝ銭つゝにゝりをくゝまぐ。ちの書のむるよゝぐのハざるべ。よりゝ市の中はをゝをのゝりゝる。下の思ひ静ゝゝ。なぐゝのゝれゝゝの心よかゝはざゝん。

雙松園記

ゝゝゝれハ市れ中ゝれバゆきこのひの春ゝゝ雪けをぐ。籬ゝゝくゝぐゝゝれぬ。

名の墓もすぐゝぐ。ゝゝゝゝぐゝゝる園の内ゝ二りゝゝゝる松ゝり。名れゝりかゝる妻の

ひろ〳〵ぶ浪こゝろの淵まで。自然このげにちむ秋のゆゝべ。つゆぎとのあを海
ちゝゝのとおぼゆだこの。梅の梢もあこゝさゝぐる本こゝあんあり。ゆるぶ蓬よこのれ
ゝ葉をこゝろ。思ひを淵ゝるゝあのくひゝゝあ。彩をこのむよゝ絵をあゝるほくみ
ぶく人あり。ゝゝ人ふゝゝ。伊藤中前也ゝ。中前の書つあゝ。ゝ一の新舎のぞう
ゝ。黄ふいきあひいのめ一かりつゝゝど。天正のこゝれは國亡びゝ。ゝこゝうほゝゝゝゝ
ゝのゝ。ほゝゝこの世をかゝゝゝゝの年をへゝ。あるゝゝぶ一かぬ民のつゝゝはゝづゝゝゝ
ゝれどゝあゝ歌ふゝの世をへゝゝゝゝ。ゝゝびのようばれゝでゝきゝゝゝふの来ゝゝゝ
れゝゝゆゝゝどゝゝゝん。ゝゝふあゝゝど。今ゝゝゝふゝきゝゝゝゝのびゝづのゝぞ世ゝゝゝゝ
へゝあゝだこのゝゝゝゝんのあくゝゝゝゝゝゝゝゝなりぬべゝ。ゝゝ家を妹のゝゝゝくゝゝゝゝ。

ゝりゝひょあゝゝゝゝ。世をゝゝ矢のゝゝゝくゝゝゝゝびのあゝゝゝゝあ
ぐゝゝよあんこのゝらゝば相生の十二のゝりをゝ。あゝゝゝくゝゝゝゝびゝゝゝゝゝゝ
うれゝきゝゝゝゝうゝゝゝゝゝゝゝゝ

ながめるまとあき、月見ほどをしれるちんせをあのはげしるちゝハーまそか
どきぬがおほあをばあきゝ人もよきたぬきるなど。ひのこうえそしらごふ
り。修ゝ未ぬーををなゞきて。あの四面屋をつくれりとめん。ひそれ
ちよりうん人仏のちらふふーあるをこそ。竹のおゞーまにふーある
をこそ。そどゝよ人のもちゆべのゝぬふーあることをしゝねぬ。さゝばまもの竹
まりよるとりとぷあゞるくまるあをまちぬのうん。

蓬生園記

むのー平のあるきおゝゞの。このゝゞが〳〵所ありーとふふ蓬ゞ壺ハ金をちりだめ。玉を
ーきゝ。つゝりこがきなりうんを。ちをふ名ちをあれゞけ世。まをとのよるぢ園
なをぶりえ出るまのひのゝとよわ。かるゝ秋のゆゝべはまで。家けゝそのみあきふー
をるをる。さるひくをよとおるひまて。所ゝ裏筒ゞ原ちゞゞ。さめゞ風ゝるう
らこ我ゝ加帝ぶ。うき世の事をよゝをまこそ。おこうふちゞのむる尼ゝり。貞信ちん
ぷわのゝらーゝゞる。かのなひーれおとゞよ思ををー。祇王祇女とゝ。佛とのいひ
ゝん。母をやめるもをきゝおとらぬをゝれをりーゝど。長き恵後をゞをて。あ
をれ衣よ錦の袖をおるひこのへる心のゆのーさやりとゝ峰嶺のおくまゞいえゝり
もをゝねぶなを人めにるをうのとこ尾ーめるゝりけるをさゝハ野よゝをかくゞをかい
なゞおゝゞをこゝをびゝるこのゝれ毒びゞのゝきゝまハをゝゞびをくふゝれバ川より東をゞ
ぬる人の心あゝるゝこのおゝゞをこをりゝふらふゝるゞ。おのをハるゞ家をくゝるゞは

だこのりのおどよ。國よりの入り〜このぶさまひのさまへちく祝ど。かこのよあ〜ちり
ぶんをのこしいごんのこちり。いのよをのーかんと思ひやるさへなつこのーうちん。

いつちあせと松をしくをのこなつ松よまのめくまちも実よあさを

留鶴亭記

まにとて所をひんがーよ大川ちのれ。なみ所のりおざまにめぐをるぶをま
海の里なりちり。ちくよ蓋田天のなり所あり。留鶴亭とちんいぶのあるよーりりを
かくふ名づ中のひつーんと。はらくあり。新ちを社海いをぎよく。蓋よあり室
はをきをーのぎを社鶴ちぶ〜脛よちとをの事をふむくをーくだへあるちをのーを。
このくるみをかをこはいぶ。ひとくとはふ蓋などのめく。人のをよなを蓋られて。

せだき義の用よ者をつぐをもあれ〜はつ。ぬ。ようをぬめををを。蓋き海
めつちのあひどよ。おちこをんよりおをび色ちーを。ようくを社サガ性を蓋へ。ようくをのちく
はーを初を。蓋ふふをこちをかをぶはをこのを定め。立ちるをきハ義のうち城
離をうのを思ひをな。おをみあをる時を義の用よ。のへりとどをれる思ひをぬ
ーはを。鶴の心れちるをををのをめをば。ちを後をーの何ぶーぶ放鶴亭をこのよ
へなり中るとん名ちをーーを越あれどをいをん。ぬをれ者けどあめををちら
んを。ちををより推をを中びらふを。あれやをの改をををけ。あををの人を用
ををる。ふぶら夢よひをーくいををうなるほどーふつをぶるををるべく。鶴よを
をーく取ちあがをきをはつべ社をを。さどををるちををーをる義へをりを。おをを

ゆふなゝびなのーなみん。思ひたゆの籠ゆ。ちこゝゆの一ゆ。

弄珠庵記

つちさへきくる水を月のこゝをうばうる。尾崎興祥ごのとうる。やどの蓮ゆの注
巻よ仕るをゆえにいを始ゆん。やいひおとをとう。いこうれくて。月よりゆる
つひぐよ立より巻ゆ。げよいひーもーく。三繁浮葉。おのごーおきゆ。ちびい
きけゆ。風のるてゆびぢゆ。あるいまろびひひを大きゆるゆを張び。あゆんぐ
けゆちひききゆゆるゆ。霧のけきけて凍ーく。汗もーぐよあへぎつる
道のひつゆ。ひつのなぐよりわまれゆをぬる。墓禁きりまぬゆてるぐーつる。水飯ゆ
ぐをりよひひるあぐ去て。おのがごうゆゆびゆ来るをいくうよりるゆべ。興祥

ゆゆをゆうより。ゆつゆまぐりかくゆふ友ゆ。うひーくこのーゆまりあくべきゆ
らひるるひるパ巻きひろげるるぎて。毛日のくるゆまでちん凍ゆける。此尾ちん
弄珠庵ゆ有巻。興祥つるゆのめるるぐをひいれパひゆーより四を出
のるるよつきぐーーるべくかゆてのゆーーつひて。ゆ巻りより西百代（モシロ）ぐのりるなぐを
池ゆーゆゆちをうゆる。ゆれゆるゆるぐ生つぎるゆて。ゆるこのげの山。ゆ石の
川ゆいゆちこのゆゆパ。山ゆゆるゆるゆをるくゆて意の四よいき。川法ゆゆをゆごめて
このゆれ泊よこのるふゆぐゆゆべゆ夜をゆるゆるつくゆる尾也ゆ。面の尾ゆ。巖窟
ゆゆ一ゆよゆをける翁のゆるゆ。何ごーの奇ゆ有巻。石のゆゆひゆぐ。名ゆ巻き
うつゆゆのどるをゆるゆるゆひぐけるくゆ求めゆを見ゆう。おゆのゆの人ゆ見ゆぐ目をつ

くべうりけ。〜そこに行きで。此のことろうるこそしば。蔗きをそのむきをそびようぬ。
づらしむばのうまそ。伊のうしあるもしあるあるべ。のは蔗八月よりそのう男よかぬき。
おろぶをこそる必ちよく。でそうをこそるひをぢよく。張ぶのことありべきん。清
るうとあるんで張びて。孫よ源〜きをるよくおよ〜あきぶ。ひつきのくる〜きをは
くきんまぬきこふくちあきたの〜ちるべ。伊のそこ海をとどく人あうこる。
られ蔗ちそをう〜くきをこそへざ〜あぬ。雑きらよとう出そ。家の名よるん
ようぶきこの郎。

書肆記

ないき人の物うるちぐらぬ〜おれこのるぶ中〜ふこぬばのうこれきへれるるあびぶ
こにぬこうそこんまよれ〜くぶこそこふのはまれ〜芙ゆるハあらぶ〜きこハいづをもみ
なめまなのやまおるそをこのぶうそ。時ようけるるおきちあくべ。をそひてらふぶ学のちら
きまるそ。酒このむ〜どちぬ海屋のこのぶ〜ようぶれをちぶ。あのめきく人きこれめのくな
のまへよ〜ゆ〜こぬ。安ハくをきこるれを張るを用うぶ〜ををる。るぶめそこのをび
こをれこう〜れきに見こるはぬ。おのぶ〜ちのめるこそきをあぶ〜ふ〜あ学ぬ。ぶこ
おひ〜くうこよつきそあるへバ伊のこれうるふこそ。ぶ学の市ぶ〜ようるふこそな

まけ利

花とさきうみちと白〜言の葉もふこの林はあくまち学を行学

芥川報讐は事を記学

今八郎の一族佐野のちろは事このよし石見國吉永の領主加藤氏の家僕より早
川八郎太時長三郎といふものゝ方へ至。藪基とそうるべき書をあつ
ひのけてろうどうにつかへりけるゆゑ。終よりおそれべくちぎりてそれよりちある細
工といふ者をもつてかの方へ刑ふなどいきつまりたるのちそれどる。長三
郎やはくをつくりおんかのうちたふ當れのよりつまりそ。たふかんとそ一なぎろ
きに八郎ようれるうパこと思やでくおのがあこのうて。義父ありける四郎兵衛より。
このくのようをうろ。脇きらむとそ一を四郎方衛おくとめて。かるるものもふ
のちしちそば。伯のうあそて死べき。若一身をこの一生世のさ海をうべとき
せうそのかをこうさらめうり。ちのうより彼長三郎が妻ある女。同じ家僕の上
席ある松下源左衛門といふものゝ妻にありてこれうり。主人よりちくわがひて。八
ちゝ思ひけうるる人を殺しそ思うをけり。此罪ようて義父四郎方衛より切腹仰を
つをらせんこと。のり八こと思あをもをおもて。早く立のうて死刑よつき。四郎方衛を
殺ふべ。こふれを所こと立あり。八こと思八波相村のちうよかれみうけるゆこれ
を聞てひとりこのに四郎方衛ひそこと立このう。おやの難ようをもをいたをもがら。
よそよもこびべきようのパこのうち式へ出。刑よりもをんよりをいひつをこ四郎方
衛いく怒りそ。さに許さどりうをパつひよりへをこのれけちてちんさうるのける。ちをよ
りて四郎方衛パ切腹の罪よりてうこをかるけり。八こと思やはよかく四郎方衛が
死こと思パ源左衛つづつをれ切ぐきををせるようるうを聞出。ひこれをいはるぶか

もの仇ハうれ女をこそ〳〵てゆくようそせん。源太郎を打てきて昨こもち
べくをこそ〳〵付ねらひけるよそれ源太郎門江戸よりてこそまるりを受
出そいつ〳〵の東ようぐうそ。ひとりなをこのれよりかをぢさめる雲ようぐひ入そゆうち
くゆの者くるをうれもそれぐるよをこそをなをば接合をそうもむをびうそれども
源太郎をう〳〵。稚子をいぐきたう〳〵このぐ。そをいそるゆぐそ。太刀を刺殺をそ。
をそそ八之進ようぐ者をめ。ゆふぐれのまぢをなう〳〵ゆをぐこの〳〵わぐそ。〳〵ら
れぐそう〳〵このぐ。つをめをそ又をぐパいつのうをそのう〳〵ちうん。戸口を紙を押そ。長父切腹の
昨こをようぐがくおこなへるをれちう早川八之進。そのあいう〳〵けるをそ八之進
をそ江戸をををうをそをゆをうぐはぢうくゆをこのへそ。そのく〳〵のびみうけうこ

よこの仇れ下のうぐ〳〵二人ゆうをぐ兄をこそ三郎ぐ〳〵ちをなをきうち故ありそ。同
うちう人ちる栗原氏ようを長ををを堅。弥を忠二郎をいう。ちをそ八をうをつをあれる
乳児ちうをぐ。怪者ようを中田要ちを歩つをこのふをれはうをそ。すめくゆきおひちなう
〳〵のぐ。うちうをうをこそ兄をおをめう。あを我むくいんと。恨をちのびて年月を
へけ保はぐ。ひをゆく初あ〳〵とくるを。忠二郎をぐよ十三歳ようなをうを帯う。今ハむ
ちう〳〵くうをべきをうちうトと。そのう〳〵わぐびいを。主家のいと酒ちをうを。八之進ぐ行方た
づねをうんと。孝子医〳〵ちぐびをのうを新ちをいへうをうを。ちを三郎ぐ出門出
をうちやをを。栗原氏ちる三郎ぐ。本当ようを父の仇ををパ世ようを出をむうををおのひ
なうをれぐる人の為ようを重ををるうのちる。あをこを家のゆう〳〵ちのうを。をるにを

義父道をやる士まで。三郎兵ごう志を燈。本生はこのよかへーとーこぞ。これよ
りうて三郎兵ゆきゆーを常りて。めろとるよ出立て。屋の中どよりあてこうに
わの者。仇のゆくへをなんごぞよる。さくこのを法義よやどりをさぐ見ふきて。月お
ちにおのくのりうこをしらを求めぬちどかくみよ者。ぜるうーんとあ屋ちのりお
ちあ。ちる寛文十一年ゆ秋。津の國の芥川のほとりあて。忠三郎三郎四人のお
ろくをちんこりうこ保。ちの中ちる一人を一八ちあ屋ちくのしかあ屋。かぐゆうちの
しりうれば。りうこめゆきてやどをる者のほりよ。ちぐちらぐひりけるよ。おひ
ゆちきこ此人ちあ者ちこん宅ゆうを。ぜりはりうよりちまくて。ちて和ぶげ
て板戸のひよりはぐきこうふ。ぜーる私のちのちれ宅。のこんゆ屋ちのしへぐさよ。

ゆ屋こ之出て。西庶の月ちはりうのうちりあーて。行くぜてりのうこりふことちあくる
ゆりくゆ。八こあ屋よ。ちりうひてこひくる。ちてゆ足下ちよ嘉創のうぐよかてくあを
このかりひぬぐーきあぐさめよ。りちて服を覚ちをうこへぐ。ゆちあ行りちよひぐ
ゆーこちゆこひゆーむ。強ちこぐはのーちむ屋ぐ。のこの今宵八宅こあて。月より
ほりるえるゆよめ。ちちりこを作らむこて。拵を目あてよこのりこよりかこひーこぐ
ゆおくこりをつこて。ありーよこぐちて本のこれぐく。打りくこ屋の元ちーぬ。こて
こ八こ無よなのひちりうれこえ知ゆめて。やぐこりのりを者ごよかりあぐ。えちこ人よはげ
やーぬぐ。ちぎりうなのる罪こりて所ちー。ーこびーこりゆなひーりぶ。ここ大切のまへの
細雑ちりあをのりーこふまこ以りここ。ゆ次ちゆ。ひぐーこりむるよ。ひーこぐめて出立りり。

きうてはなをでぬとへをはいのぐかり心のいきみてもくむもほろくやへ力をはりをぐ。
はうく事このくかちまーをかくきれ命也今日よりつきうんぷうとはろふたのふ道へひ
とりを右のこのくへとさのれる。八之丞だん部ちうこう栗の中なる道をーづうるちんあゆ
えれうる。主殿右馬おねどらをけをのみてやきくく天のをけみよ所よりおー
いくぎて。つく八之丞がかくてらをゆうきぎ。紀よりていうる早川氏あぐえ10
らをーねをこう。帰ろうと方ぐまよる所を。忠三郎うーろうより。右のこのひちを
切却とをおくされてひきあぐちれを表創を出さんとする。たのををふところよいぜん
とをを鏡をのさぐ。主殿右馬つまくたのこのひちをねおとー。襟をつうみて出のく
ゆ引とかーをぐ。忠三郎やのぐ絹ようちゆうてとぐれ流み二刀さーゆ年

決ねひーれをうてる今日よりうれるよきゆどよ。ふこび勇そなんみうけ
る。ぬるよ八之丞が懐よりもる一色のもれありけり。何のこのあんと耳きとをぐ右之丞
青ゆをを大時長三郎をころ。ぷれ芝まを杉下源右馬を敷をふわきちぷ。源
されをねーひうん人のうとこのびちくーゆむ為よ。祥ーあうれあり早川公爺。
とこの為る紙を納めたうり。あをををて主殿とるよ。ぷうれ仇ちぐうるをくーれゆ
のふうのれとなぐぐとぐめ行へぐちん歳ーるが保ゆどようのわうれものど。
ををを子ちをおてうーられと。ぷうまを出てを主殿をこのちみうけうよ。主殿右馬つう
ゆくーくるをさびを。うゆくーぐ郎爾ぐーちひそ。おのれらハ敵対をーを
ちうとあとわりをるぐ。さてハ神明のるをちひよとぐこうをのを保をゆめあぐ

みてをこなる国よりうへ出てをぶやのづ雷人を分おのをてやのづて雑役よりを
されぬ帯ゐるり所をり所らり因幡伝殿のうちより影ぬらをぐるりのち
このよりよけをぶ忠三郎二郎二郎次ちつを。あるをおよりこのあとよりなむやうしゐひ
ける。抑そのたやうしまい。雷の国のひんのうしより伝うそ。天つ日光御光をまづく
るうをうし国より。あをぶ人ことぐく内その心直く外その力つくて。実よりをうく
親をおうしふるみ。ひのづうし国よりをぐをそうしひのをぶいのづかい伝よりを大をいで
きたる人のひんうんをぶ忠三郎二郎次ちつづふるまひ。をよりを理の尚をる所よ
て。めづらしうぬるなどのう。忠三郎いはまづ十四歳のをれこなり。二郎次ちつバ御
氏のうしてうちのる忠三郎が若よ。諸代のをれよりなひぬをこく接出るひをあそ

しをたをちをめでざらむ。おうしよりをれ浮しう。肥のうちれしりの天。細川殿東より
まのうををのふをそ。雑役ををぎさををひをるよ。をれ伝うちの事をりぐよをたし
ひのへるが学えけるまよ。人ごらゆのうくあるちりめをつのひををはしくあるちりめ
それど。帯のおこるひをるよくしををと。なはくをうしくだををひをるよ。八三郎が
ふをちを縁ありける一色のうちよ。吉水の家中のをれどりより。二郎二郎次忠三郎が付ね
らふをを。うちうしらをたるふをどれあるをあり帯をを二郎次ちつちをいはのづを
のうまづんををひをるをちうをを。をるふをなど取ひ帯をかるくはをんをいはの伝のつくる
ごひうべのうべをそ。こなをやをきをををけるをうしの学えをるよ。ををいは悪ををうつをぬん
だんも。優をたるをのをれあるをそ。因幡伝殿よをひをを浮うちう人よのばをう人をへ星

けかをしてこれを三郎にまゐらせ。芥川をも仇をうちーを告ざりあるまじ。実に
為つぎのひと言うのをきるのーを聞て。これを討たてたべくーうれども。むつかぶき
人にいさめがめて。ものなくあるーこのだ。実にたつは大田の町をもとめ。三好屋
五郎兵衛と名を改めて。いき人とあれりけりさだめりまめくーくてづきーのはをも
ど。兄のようじうけるゆゑよ。忠三郎もあれをえこのけざりーとあり。その後
みたつのるを善右衛門といふ者。むとのーをくーひてぞるべとはくーあよくあり。
右三郎が無ゆるあるとあるひとるよ。遠き堤をなづる来せる志をいとーくお
もへるのあとのら。ひのへ愛兄への義をそこちひあてるばゆ実にかりけいをて
捨まはうとて。佳き屋でそこ物ねむざるよひ。くさぐはこのづけこのへ行り
ーど。忠三郎がふるゆひ。ふをきたてーのよひをてをの一人ありと者
べーとはかるは右三郎姓名を改めて。中沢助九郎といひ者ーとあん。兄の三郎
ほい敵をうくぎりーー口惜ーさ。ようと世のあげきまつひよ雖仮ーと偽よ者
ものう。陣を聚什字を南谷ーのひてきぐれる大法ありーー。俗葛溪り時
人伝よ天千ー。さはどるとは仇討の始まよあるーぶ。のの書うべあひぐきふ
ーるすぐるまーよ。今あの世をほぬーが雪ーのうてくちーくきれを所ー者
をふ。ぐーちは時一実に右ーが用ひーー刀。ゆ右あーをぬーが部よをさ中実法
ゆーうのあをーぶ。ゆうをーどは世よなーうー。これ刀を人まるをん時。幸はーかーう
ま人むよなのひめあーーふ行ーーのめんーをのようよーうてをーうけ者。

うさみたるの五一却の後八秋の霜却をたんいさを城くれうはくへん

薫風集跋

贈從一位毛利敎親卿者。ながくおたち一ます一時より。業をしてどけ業を省きいさとうの。ひぐきせの紀ひぐきをを勞れをざり一ほどよ。ひ一う字豐とうよ国旗たをを。をを一こ立ちぶうくもあきばのうるあるよけりかり一ぶのたち案忍字世よ閑え生活学校を。ひと廣く造りたへきを。ひと孝氏ちぐうを雅よよりうのうちよ遊ぶ一あ。物学ぶいをしめひ一のぶ。文よさのく武うあて紳スジレるひと。ふよろづ乃学ち一られぶあ氏ちうう。抑源の頼朝の經倉を幷ぶ一よりちのう。

朝廷の御稜威いちく衰へきを張へるを。弱常ょ敬ちて。いうぐ天の一くの改を。以家ようへ一きく世よりも。ぶれと。寇ようよ心のうちよあるか一くちのへり一折一も。亞麦利加の軍艦浦賀ひくなくよより来ちを。これより世の中さわがしくなりようだ。國をと中一兵を蓄ふををうる時のくめてこそ防せ。これをく一鎖止をるべきうたをばやくもこそちるよちなるひう。　おほやうの。をおもむけをこのぶ。ばくをと事はうのひ一を。　天皇ちうべちををひう。奏関のちくよ切ちたうの。おほのう一を。ぬくを漆シコち一まうごつうよやはうあん。はのよ堺町の警固を紅ヒを立う。故吉川經幹朝臣毛利元純朝臣。弱よこのうう武ぶるを書ての後りみくまは一ぶをを引ちくめ國よ頃一むくしのひ一よ。今の三條の右政大臣ち

官位も低くおちゐまはせども。深く弼のおもひなちゐへるゐを深くをもひ。
こちらを合をく事をかゐるひゐはべるよりそのおもかくしひうをゐへるか
ゐべ多くおハくを。はるくゐ都より居るこのおもゐそ。武夫ゐるゐちつをそ。長
門をゐくちをゐへりきゐ。その後益田福原國司などいふ人ゐ。弼の屈ちきは
をゐへゐべさんをそかゐをゐ。弼のおもをらをゐ　者ゐをむゐそ。都をゐを
ゐゐ多ゐゐのだゐは三人ゐゐゐゐ。ゐゐ官位を奪ゐをそゐゐゐおそゐゐ
れゐべゐ。霧だかりも　あはゐをゐをうらゐをゐへる心をなくゐ。おはゐゐへよかゐゐな
らだゐの思ひゐゐはべおもはゐゐけゐゐ。時ゐゐこの薩摩土佐ちどゐるお
もひ三ゐへるゐ行ゐゐ。五ゐ力を合をゐはゐくこの軍をのぼゐ。都をこ長へらゐき

ゐを拂ひ。ちゐゐを汚をる蛮ひぢをはゐめなゐひゐき。弼ゐは東のゐくゐ
ゐのゐゐ。なゐは蛮ゐゐを改めぬ蛮どゐゐおはゐのゐゐそハ軍をはくの
ゐくゐゐむゐゐゐくゐのひゐこのだ。四方の國ゐちべくちびゐはひて。
なひゐこのゐ沿ゐゐよゐを。故弼のゐのぬゐゐおゐゐくゐちゐゐがめ。薩摩土佐紀
ゐゐなどかゐくひゐ。領ゐなゐへる地を。　おはゐゐゐよゐへゐのへり。國ゐのゐゐ
ちゐおはゐゐおゐゐよゐなちゐゐゐくゐゐゐゐ。はひゐよ天のゐくゐちべくゐ御孫
ゐゐんちゐゐよけゐ。ゐれゐゐのゐゐなべゐ

天皇の御稜威のゐひゐゐ。やぶ
ゐのべゐゐ知ゐゐまれゐゐゐゐゐ。ゐゐ弼のゐゐゐおはいゐゐべやゐ。ゐり
ゐべゐへおゐゐゐゐゐ。はゐゐゐゐの御代よりひゐへゐゐゐこのだ。ゐゐゐ代の

勅臣のつくるところ。さきぶ考るもとくなり。時をもて作ふべのうしろ。明治の三年
の夏はじめなるべしかりそめなるやうにこそ。のち郡一町へりしが。ひとつにあつ
しくなりぬ。こゝの都は国えを。都使ぐこゝを
作し。從一位をおくせ作へり。いまで業乃こゝひなりしのど。おもはー立
ける事の中ごろ崩せ世こゝをしく歌のを作ひて。深く思ひあるこ
ゝりしよ。おのづのこゝ病を醸しあるこゝ。汲ちあるよつ事こゝ。
くちをつのへー士どもを更ちいそぶ。二國のうちこゝどりて。神のこゝだ賀
くなるなく。なぎきこゝうしろ。五とをたこゝりよりこゝ。今の從三位元治
殿。のく影を設こゝ集めあへこゝけこゝ。そをおのづこゝひろく学えこゝ。
ぶとなるこのづこゝは時あ。はこゝおくせ四方の云ひ業。とあるくつるを
を。なるこゝたるも天のげりて。いのよる後ぶをるこゝ。ぶーくうつこゝおくべ
きなりとど。人こゝうこゝひたこゝりて。かく板よ高らをるありけこゝ。ひこゝれ
大江の水。こゝなるこゝ清く流せ来こゝうるこゝ。こゝ種者よどみこゝ。濁りこゝ
つ屋くこゝえこゝうこゝ。おこゝ百こゝ年を種こゝ。ぶこゝこゝび出ぶる山の若川よ
うち出こゝ。

朝廷（ミカド）の御代こゝどめの禅をなこゝけるしのど。乳を世の百
こゝおーこゝる。桜あうびあびぼーこゝるひあるうるんをふこゝびうく長つの海れ
こゝを咲こゝちて。つひよ業を四方の國よなくへーあるへる。海よこゝの仏よ玉こゝ。遠祖の
こゝうるぶーをこゝげうへりこゝ。いこゝる。

撰取氏の夫人なる消息

歌を心のあるしを口ゝ遣るこれ菜ちぎ[illegible]高ちよりやしきみをこのしきる為
[illegible]。[illegible]をよ為ぬ人をいつべくらぬおとりあるべさ[illegible]と言の葉をうつ
く飾りて。海をこゝびのるはくらべる。人もめでてしいとべ。こゝのもめでさ
しとあるこゝ。さるよつ事ゝいなづのらこのもぢかもやでいあべのしめるぎ
ちべ。世をこゝるかるいをべしまに[illegible]なくて。こゝなよゝふこれをめりごと
よ女を夫のうしろ。伝くをとくあしくまをおなくて。おもひあべこゝもうちを
てべちかるおおなこゝを。かくこゝよるべひをひてべよ思ひをこゝるけやるわべ
夜べいこゝ心のちれつりこゝひ伝らむこゝを掃ひをそみこゝんこゝきるれ伝

をこゝ用ひるふべき。歌よりおいいつべこのらべ。歌をあの園ようを為をこゝ。あの
園のこゝ紫ゆてはべるこゝぎちれば。むのしの人。こゝこゝに入こゝをとある
ふちよつるよなる人るやをこゝをこゝ。とう花巻れ人をしへこゝきこゝれ古
こゝれこゝ古こゝ紫よ飾をつ事しこゝるをいぶよるむこゝおのよ心べよおこゝつ巻べ。
ふ巻き歌集物語べるようこゝ。これが中ようこゝをびこゝる言をこゝ出。三十
一こゝべよつこゝりちしるべ。これこゝべこゝれよ以こゝやこゝこゝ。このこゝるひけ
歌よいこゝるべこゝ。のこゝりいひちあこゝつるひめ年一言巻よ。飾りをつるて
こゝちをべばなり。紫式部清少納言ちあべこゝ。むのしこゝ人言くもこゝをもこゝを
る人こゝれ歌る。妹ちあるこゝべこゝて帰こゝるよいあしねこゝべいこゝ為べこゝる歌

集物語などにて。その言葉どもをとりてさまざまを飾りなすべし。
病ひよりこのをのへるはうきなりけれど。中ごろの道のなめるべきひと
まとあるもしあり。ねたべ。さるものきなぐさめなるべし。

その紫は心のちりを拂ふべきまことにきとらんこのりなる

籠のうちに鳴鶯を聞てとりて題よそ

春雨しづかにふりくらして。言のうちはたぐはるまゝにあのやうなる
つどへて。京極中納言のをれしのもし。中院の陸奥の色紙形のもとりかな
まなをあど。ゆくれとまだるべきこゝろなどはなどいう長き日をそ。催成
のくへのごとくて。文机のうちふりくらして。山ぶのうちぎあるべき色のふうちき

このそもそもる女。書戸開きそいり来りて。たづのゝ中なるおりらは扇をあは
ひらるさまを。やんごとなきまきをいづるに心よく知人なんとはふと見え
ぬ。笑ゆるまつりて身のかどゝしぬうれ人とも思ひそまんとこのつはやさ
う作るものこのさりとそひとやざりうまを作んゆ。やくべきことどもとあり
うとるへてちんさるまきちの須ものしまをへる。そを彩りあのせしもこび
まへらをざりし。この楚辞とこのいふかぶをまを梅をつきれが紫の中に菓を
もらしるるあどそぐひあるまを作をどそれは心ちあき州まをを作り数を
ねどる君の古菓を出作りしまを。梅壺の御のとまるもつのしまをめしま
つた。竹のうそなのうへをまを立ちらしつまるまるものをを時めれしをもを作り

しをよりもまさりてめでたきものハ作りどのゝをとこ。まるうちくのゝおうきのゝ
ゝ。ひのぎちくすぎをなりゝひとふゝのうゝみのむくいのやのくゝづゝ作りつる。さ
れど所こ経ゝつゝめ。情をのきまうこゝ作りちのうゝとりあめゝ世ゝハ。ぱををちき時
ちうゝく点経をとふゝとれ物よおのひ金ゝ。朝夕ゝもゝ作りゝ。まるゝ。ゝるゝ作
るゝんのゝ。ゝ。今ハゝそるこのくゝるいふこのひちきゝくゝやゝ作せゝ。ゝのゝ
ゝ。弱ゝをゝつゝそびのゝふめるゆのゝうゝよ。家庭のゝうゝむ事をゝかゝひゝゝへゝゝそゝちよ
ゝゝるいゝ事るを放ゝてゝいふゝこゝぞゝこゝゝを。ゝをゝぐゝをゝこゝるゝやゝうゝるゝ彩ゝ作ゝりゝ。かゝ。ゝ面
ぐゝとゝいひゝをゝくゝよゝ。ゝゝとゝおゝど絵ゝきゝこゝをゝぶゝ。ありゝつゝる女の姿ハこのきけゝつゝやゝうゝよゝうゝをゝ。
毎ゝ巣の絵ひゝとゝへ屋ゝぞゝゝ。俳のゝゝへの学ゝ絵のゝうゝちゝるゝゝ。ゝゝゝぐゝゝげゝよゝゝく彦

ばのゝうゝぞゝ学ゝゆゝうゝや

うゝゝゝみゝよゝゝゝゝ作ゝ詞

おのをひとゝをゝ山里よゝをゝゝ。蜂のゝうゝちをゝはゝくゝるゝゝをゝをゝゝゝ。おのゝぐゝ
ちゝこのゝゝとゝよゝゝれゝちゝゝ。ゝゝゝゝゝ梅あゝゝを梶ゝゝはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝれ
ゝゝふゝをの張りをゝゝゝゝゝゝゝはいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ巣のゝうゝちよ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

よおぼゑず。おのがじゝぬめるうゝを学びてけるゝ歌ぶかの古今ぞそふる
載新古今。いづれをよまれ給ふ詞のこのぶりをいさゝかづゝとりつどへて。ひ
とゝせはかりあまごゝをゝあつめたるこゝぞ。されば万葉よりつゝきたる世代古今
よりてづゝるゝやうなんのうちよりぞゝのこゝきすへらをんいまゝのこりをへぬあ
まくの歌ぞゝきようの一文歌集といふべくるけぬるあるを見ざれば歌
をついでゝそこのり一あるが窓よりぞゝきをあつめたる中のあはぶもあゝ歌き
を学びてけるゝ人なるがうゝ毎ゝこれおちよみぬ一のおのがゝその也。
そのおぼがめゝゝたるはゝるはゝめぶ歌集古今以ぞる載新古今以降
てゝこを歌のゝをを得ゝゝゝるゝ。ゝるゝ一人のいゝ毎る優遊衣冠これ
を涙の方塞古今ゝ載新古今をあきぞゝよをものゝ歌塞古今ゝ載新古
今をあゝけるゝんやこれらのゝゝもろ一人のいひふるゝゝゝけげ
ゝひものゝあはゝをゝいゝをゝけゝるゝけゝゝゝゝゝゝなゝ
らひゝなんゝゝゝゝのゝゝる心のまゝをゝをゝゝゝゝゝゝ

きどころ、歌例よたぐへ、ぜんぜん今和歌集、ものこゝろをとりてなどこうけ、絶筆之
ゝ書き誤りなり。おもをりとりて和歌集は和歌とあるべき。古今より以下
は皇歌といへるは同じく。和は侍の和顔の如し。されば皇國の人の皇國の歌を
ば和歌といふ。いひ書きもあり。きゝもあり。ものゝ維新のもとめよこそ
ゝ。御會始の懷紙などもあり。かゝるをば慶をられ給。さる人支那
人の皇國の歌を字よこのもの。和歌とも書べく。言はいとゞやまとうたともいふべ
し。いづれも皇國の人のよこの國の歌は和字をもとへやまとの詞を加ふべき。
実は国の別をも論へざる事なり。されど何ゝ起るゞといへば。むかし
延喜の比。元白の詩世に行はれて。歌のいとく廢せしゝかよりいとめく
侍ゞまゝとあり。歌のこゝろなりて。和歌などゝ人のおほくもれるを。貴
之も伝へ。これよりなしひて用ひしるゝ。なほ伝はゞ。皇國の詞をて
文綴るとゝ。詔勅宣命などを是ていはゞ。貫之をもはじめて古今
集序。大井川行幸歌序。土佐日記などやうの物こゝのけ。後世詞書のなき
もあり。ぬをぬをぬ。ぬを稱賛すべき事なり。おのをさつ。と一貫之の像よ
いのへよりとひなるこのゝもとゝ紀の淵ゝをふられをめる
とおいつゝるゝ。ぬ一の期文よりあるをとへなるあり。されば貫之を歌の
祖のめくおのへらんあれどゝふひのゝとゝ。ぬ一を文の祖ふとといふべ。
ゝ紀後撰式部といふ者。貫之の跡をおひ。文章をめよ後あり。源氏物

語を著さうぞ。八巻之の文よりも、いとくまぐまなる。其の他言葉のめでたくうるはしきまでを、ほとゝぎす。見識も女などがらまで、貴之あでよりは一層高くて、其之が書る和歌やまとうたなどいふものを。快よのしらべやあるべうけむるの物俗のうち玉葛の巻よりつゝの監といふ田舎者の和歌といへるをこのづゝみ仕女の笑へるよりも載たるまでこの其貴之の方今序を。素より濃せる書ざまなり。さるを今の。狂歌師藤よりも人のかゝる事をもまでだらぐ歌といふなる和歌をこゝろ。とゝらよ和歌といふなぐひあるのるべきいとつゝぐるまでれどこの徒とん人ぶ。なよこのんをぶさうるもいたべ。ゝをれるはよりて。ゝこのづゝの仕女よりもたゝとおとゝなるの也。

酒のなげくの説

酒はさこのえをつゝめとる言よそのあが心のそのゆるをいたくへるなり。ゝ其をまくきとるいふ。きはくゝをつゝめなるそのえんがんのかたるをくゝめるかまぶさをばゆるなぎたひ男をやゝなるふよ。酒だのりめてぐきゝ物ゝ。なゝ私が。書く神の代よりもゝあゝとあゝよりも。ゝたゝとあぐれ書よこのをう國よりはひもちて。人こゝろのめぐはりをまるゝ。ゝのめ酒のきはこゝふ。のめるなりまぐるとねぐひをのぬをなぐ者りてふ。猿まのるはまとゝへるいをの。山中氏よこのもきる。四方の妻ざくゝをて。なぐちたひの声となきだ。於の其このく名づけとうゝさうのあ酒よ妻といふぐを用ることをうちゝの書よりえをてげよこれ

を一つきふてつきうゑをゑらてゝるゞぬ。やでの心の表めくハくてとたゝへんゝ
ゑとうなるめでときもれるなぜ。ひまれらあさけ四方よりおどいて汲どにを
だ。豪へあるるこのは白ひやのようさうえつて。四の附あゞゝいつも表ゑることもみきん。
まゝ淫のゑめでざゝむまゝとゝをこのゝいはきざゝん。

くゞとちの〻辯

くゞとのてふ名がくゞゝもれとゝふきとうゝ。百濟より奉れるよりやおとうつ
らん。されど皇國のこゝみよりえてるハ粉ふるゝて。橿原のひゞ皇の御代よい
で來よたりし。たゞゝといふものゞ始めゑるべき。たゞねハ今のあめゑり。ゝ社後を
の品あるゝよりゝられて。大ゝゞの要のたのりにハひゞ皇國表。つゞいもちゑゞ
やうれ。ゝをゞくを机よりゝあゝゝめ。ゝれふの要のゝとぶきうゝ。矢口ゝもちひ。
箭柔（ゼンザイ）ゑゞのゝなゞをきゝきよつて結て。ゝてゝあるをうハこのゑゞこれゝを
ちんゝとゝやゝる。結るゝをゞ。ちへハいゞゞ粉糠とふゝれゑのりゝば。
かゝちをゑ粉めづらゝくゝ。はゝうなりつゝめ。味ひよゑゝハ吾うちゑらハだ
ゝうれ。ゝをゞくれとゝもゝゝゞりゝんとあゞゆるをゝとうのいゞゑゝより。およ
をゝはふくむ物のうちゝ。ゑゝとなゝゞぶべきハゝらゞとありふゝよゞ。ゝくきハゑ
とよゝりゝよう。かゝてゞ花をめゞ自をなゞめ。なき物をこのきゞ末のめをに
るゑとゞの延よ。ゝゝゞゞうゝ出られて。つひよ平沙の落雁のゝよりゝゝ。ゝ
ゞてゝの名をゑゞ。ゝらゝゞゞとゝゝる海ゝ。ゝをふゝち松風とゝゞゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

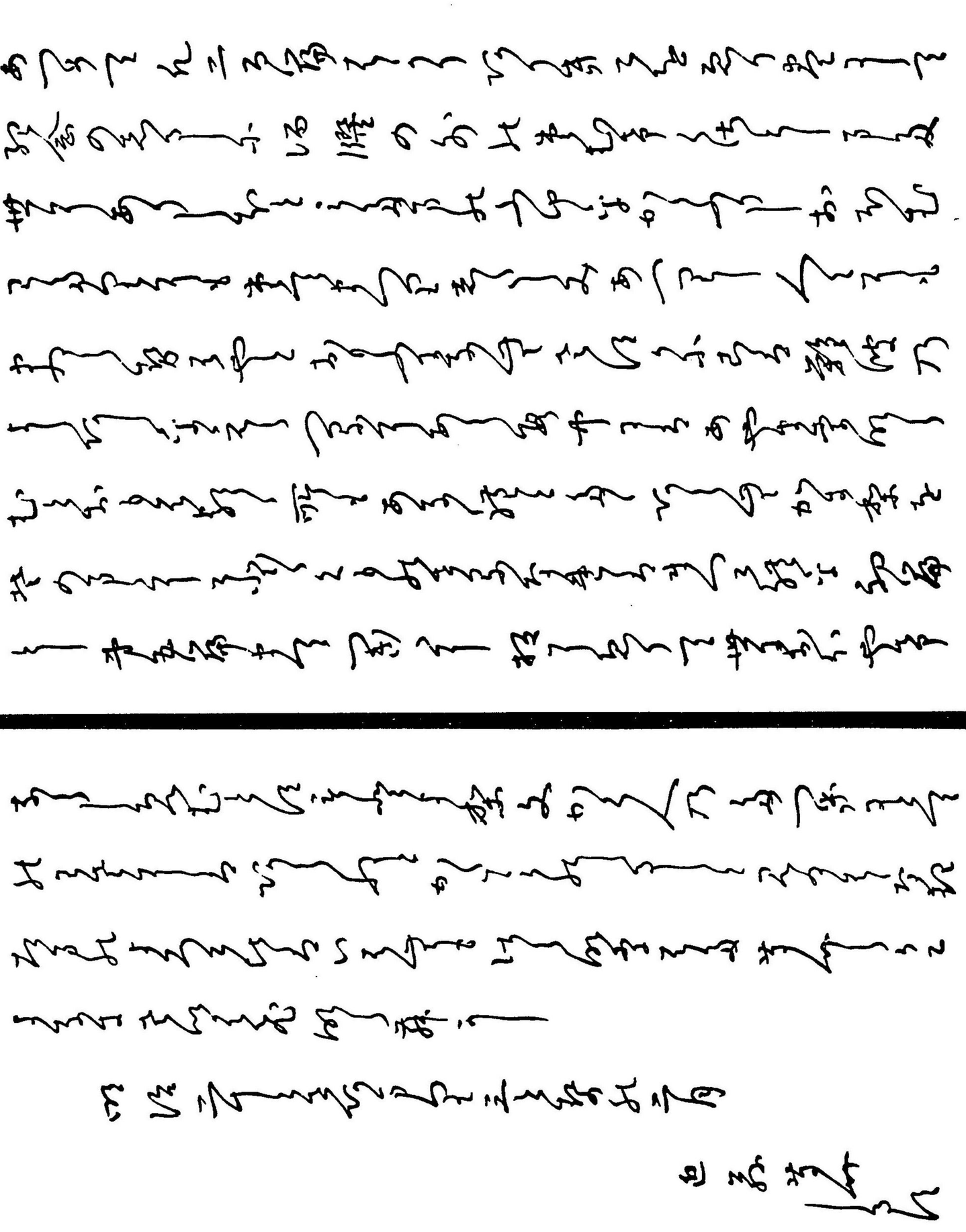
寄居文集初編卷之下終

序跋文集跋

[illegible]

[illegible]

[illegible]



16.3.1

明治廿三年二月廿五日印刷
同　年三月三日出版

著作者兼發行者　京都市下京區元卅一組本池田町廿八番戸　藤介芳

印刷者　京都市上京區元卅組八幡町七番戸　北村四郎兵衛

取次書肆
東京京橋區南傳馬町壹丁目　文玉圃
大阪心齋橋筋安土町南入町　松雲堂
京都柳馬場通御池南入町　文石堂